



第2回 老朽化・地震対策の現状

習志野市の市営水道は、1949年(昭和24年)に事業を開始して以来、安定供給と健全経営を目指し努力を続けています。しかしながら、長い年月の経過とともに、全国の水道事業者同様、様々な課題も顕在化してきました。その現状をご理解いただくため、市営水道の現状とこれからについて、4回に分けて掲載しています。

今回はその第2回、施設の老朽化・地震対策の現状について、ご紹介します。

これまでの掲載内容

第1回 市営水道の施設

今後の掲載予定

第3回 更新コストと統廃合について

第4回 給水収益の推移

浄水・配水施設の現状

浄水・配水施設は、毎年、定期点検や計画的な修繕を行うなど維持管理に努めています。しかしながら、第1給水場の浄水施設は昭和62年完成、第2給水場の浄水施設および第3給水場の配水施設は昭和53年完成と、供用開始後多くの年を経過していることから確実に老朽化が進んでいます。また一部、現行の耐震性能を満たしていない施設も存在します。そのため、将来的には、多額の費用をかけて更新工事を行うことが必要な状況です。



埋設後40年経過した水道管の様子
腐食により生じたくぼみが確認できます

取水施設の現状

保有している19本の井戸の多くは、完成から50年以上を経過しているため、経営視点から江戸川からの水道水を増やし、井戸にかかる負荷の軽減・延命化を図っています。今後、更新すべき井戸の精査と計画的な更新が必要です。

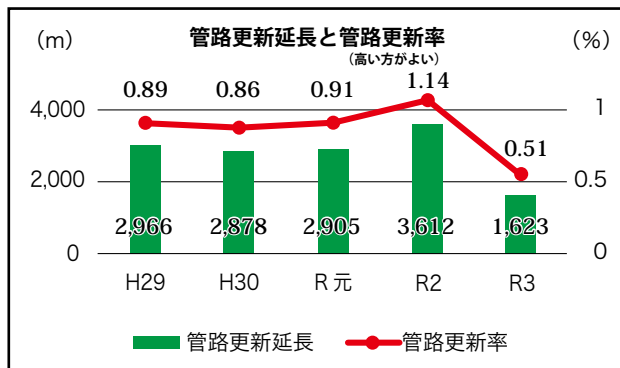
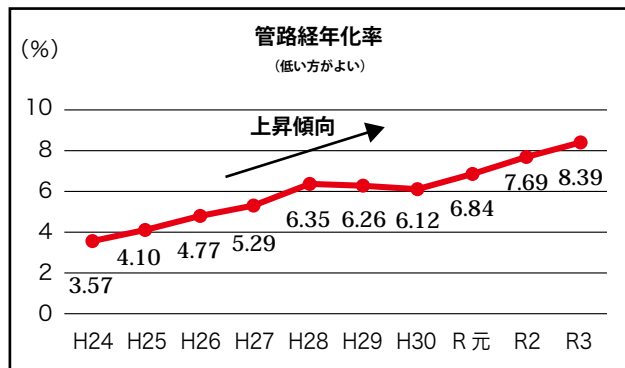


第2給水場の浄水施設
老朽化により亀裂が生じています

水道管の現状

習志野市営水道の水道管の管路延長約318kmのうち、導水管や送水管、配水本管などの基幹的な管約25.9kmは、耐震性能を満たしている割合が未だ56.3%であるため、今後、残る管の耐震化を優先的に進めます。また、管路経年化率(法定耐用年数を超えた管路延長を示す指標)は、8.39%となっており、年々増加している状況です。

管路更新率(保有するすべての管路のうち、1年間に更新した管路の割合)についても、十分な状況とはいえません。特に、令和3年度は多額の費用を必要とする大口径の基幹管路の更新に取り組んだため低くなっています。管路更新は今後とも継続的に取り組む必要があります。



今回は、老朽化・地震対策の現状について、ご紹介しました。現在まで、施設の修繕や水道管の入れ替えなど、計画的に実施してきましたが、安定供給を維持するためにも継続した取り組みが必要です。

次回は、更新コストと施設統廃合について紹介します。